

招請講演Ⅲ

21世紀の医療保険制度の構造改革と包括支払い制度 (DRG/PPS) の導入

鷺見 学

(厚生省保険局医療課)

and lengthens the expiratory phase, which contribute to hyperbaric bradycardia. As for transient bradycardia, we postulate the offsetting effect of hyperbaric deconditioning, a condition that exhibits an elevated resting heart rate. It is concluded that hyperoxia is the primary factor responsible for initiating and maintaining hyperbaric bradycardia, whereas non-oxygen dependent hyperbaric factors play a minor role.

医療は、国民の生命に関わる重要なサービスである。こうした医療を国民に公平に提供するため、大正11年には健康保険法が、昭和33年には国民健康保険法が制定され、さらに昭和36年には国民皆保険制度が実現するに至った。その実現後の高度成長期における賃金上昇によって医療費財源は拡大し、これを原資とした診療報酬改定などによって、保険診療の範囲・内容は充実され、医療提供体制の整備が促進されてきた。現在、国民は、比較的軽い負担で、相当水準の医療を受けることが可能となっているが、これまで国民の健康の確保に貢献してきた国民皆保険制度は、今後とも、維持していかなければならない。

しかし、今日、国民皆保険制度は大きな岐路に立っていると考える。経済基調の構造的な変化が生じる一方で、国際的にも例のない急速な高齢化の進行が予測されている。さらには、国民意識や疾病構造の変化、医療の高度化・国際化、公的介護保険制度の成立など、国民皆保険制度をとりまく環境も大きく変化している。

こうした環境変化の下、国民皆保険制度の中長期的な安定を図るため、どのように給付と負担の均衡を図るのか、またその枠組みの中で、どのように良質かつ適切な医療を効率的に確保するのか、重要な課題となっている。持続可能で国民にとって望ましい制度とはどのようなものかという観点から、今後の制度のあり方を早急に検討しなければならない。